

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 6 日現在

機関番号：25201

研究種目：若手研究

研究期間：2019～2023

課題番号：19K19570

研究課題名（和文）精神障がい者の就労を促進する農福“医”連携モデルの効果検証

研究課題名（英文）Verification of the Effectiveness of a Model for Cooperation Between Agriculture and Human Welfare and Medical Care for People with Mental Disabilities

研究代表者

松谷 ひろみ (Matutani, Hiromi)

島根県立大学・看護栄養学部・講師

研究者番号：10642655

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、農作業に取り組む就労継続支援B型事業所を利用し、安定した就労を目指す精神障がい者の農作業への意味づけと、精神障がい者への支援スタッフによる支援プロセスを明らかにすることである。その結果を踏まえ、精神障がい者の安定した就労につながる農福連携の場へ“医”が参画していく就労継続支援B型事業所における農福医連携のあり方の構築を行った。試行的な効果検証の結果、医療的な知識をもつ看護職が、支援スタッフに対し、精神障がい者の精神症状に伴う言動の意味やその捉え方について情報提供するとともに、一緒に事例検討会を行っていく協働プログラム（案）を作成した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

「農福医連携」として農福連携における“医”の参画のあり方について検討し、実際に取り組んでいくことは、精神障がい者の働くことを含む人生のサポートにつながり、精神障がい者がその人らしく地域生活を送るための一助とすることができると考えられる。また、農福連携の分野だけでなく、精神障がい者のすべての就労支援へ応用可能と考えられ、社会的貢献が大きく、本研究に取り組む意義は高い。農作業を主とする就労支援の場での精神障がい者やその支援スタッフを対象にした研究はまだ多くなされておらず、精神障がい者・支援スタッフの農作業を主とした就労という営みに関する語りは、今後の支援への示唆を得るうえで、大きな意義がある。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this study was to clarify the meaning of agricultural work by people with mental disabilities who aim to become independent by using a continuous-employment-support Type B services to work on farm work, and the support process provided by staff to people with mental disabilities. An agricultural-welfare-medical collaboration was established at a continuous-employment-support Type B services, where medical professionals participate in the agricultural-welfare collaboration that leads to stable employment for people with mental disabilities. As a result of a trial verification of the effect, a collaborative program (draft) was created in which nurses with medical knowledge provide support staff with information on the meaning and interpretation of behavior associated with mental symptoms in people with mental disabilities, and hold case study meetings together.

研究分野：精神看護学

キーワード：精神障がい者 農福医連携 ケア 支援プロセス 就労継続支援B型事業所

1. 研究開始当初の背景

わが国において、働くことを希望する精神障がい者にとって働くことが当たり前の権利であるということが社会全体に浸透していくことが望まれている。しかし、精神障がい者を取り巻く福祉施策、雇用施策には依然課題が山積している。また、農業分野と福祉分野を結びつける障害者の雇用施策として「農福連携」がわが国を挙げて取り組まれている一方で、諸外国では、農業をすること自体が「ケア」として位置づけられ、それらが法制度化され、労働政策とも統合されながら障害者などに提供される仕組みが整いつつある (Elsen & Finuola, 2013)。諸外国においては、『ケアファーム』といったような農業を取り入れた障害者への就労支援による効果などのエビデンスが積み上げられてきているが、日本においては農福連携、そして農福連携に医を含む農福医連携の取り組みについては、まだまだ体系化されておらず、かつ事例分析のような形での報告にとどまっている (濱田, 2018)。農福連携の場で就労として農作業に取り組む中で生じる精神障がい者への効果や意義、困難さなどを理解していくため、わが国の就労の場における精神障がい者にとっての農作業の意味を明らかにすることが必要であると考えた。

また、日本における精神障がい者の求職者数・雇用者数は今後も一層増加していくものと予測されるが、疾患と障害を併せ持つが故の疾病管理の難しさなどから多くの者が離職に至っており (内閣府, 2019; 厚生労働省, 2013)、精神障がい者の就労支援への医療の参画が求められている。しかし、農福連携を推進する上で重要な機関である就労継続支援 B 型事業所は、精神障がいをもつ利用者が増加傾向にあるにもかかわらず、直接、作業上・生活上の支援をする職業指導員、生活支援員に資格要件はなく、医療的な視点を持ったスタッフの配置は必須とされていない。これらのことから、精神障がい者の生活支援や就労支援に関わる福祉分野、農業分野、そして疾病管理に関わる医療分野が専門性を活かしながら効果的に連携していくことが求められている。効果的な連携のあり方を検討するため、農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所における精神障がい者への支援プロセスを明らかにする必要があると考えた。そして、精神障がい者と就労支援に取り組む職業指導員・生活支援員の双方の視点から見た農福連携の場でのかかわりあいや現状を明らかにしたうえで、精神障がい者の安定した就労を推進していくために、どのように農福連携の場に“医”が参画していくのか、就労継続支援 B 型事業所における連携のあり方として、農福“医”連携モデルを構築すること、そして効果の検証を行うこととした。

2. 研究の目的

就労継続支援 B 型事業所に通所する精神障がい者にとっての農作業の意味を明らかにすること、また、農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所における精神障がい者への支援プロセスを明らかにすることである。そして、それらの結果を踏まえて、精神障がい者の安定した就労を推進していくために、農福連携の場に“医”がどのように参画していくのか、就労継続支援 B 型事業所における農福医連携のあり方 (農福“医”連携モデル) の構築を行い、試行的に効果の検証を行う。

3. 研究の方法

1) 農福“医”連携モデル構築に向けた質的研究 (2019~2022年)

(1) 就労継続支援 B 型事業所に通所する精神障がい者を対象とした質的研究

就労継続支援 B 型事業所に通所する精神障がい者にとっての農作業の意味を明らかにすることを目的とし研究を行った。

研究参加者およびデータの使用

研究参加者は、就労継続支援 B 型事業所に通所し施設内もしくは施設外就労にて農作業を行っている 20~50 代の精神障がいを持つ利用者とした。そのうち、スタッフと相談の上、精神症状が落ち着いている利用者であり、スタッフから研究者へ研究参加者として紹介することに本人が納得し、説明により同意を得られた者 13 名を研究参加者とした。なお、このインタビューデータは「精神障がい者の就労を促進するエンパワメントの育成に関する研究 (島根県立大学出雲キャンパス研究倫理審査委員会承認番号: 106)」の研究の一部のインタビューデータを使用した。データ収集期間は 2017 年 2~3 月であった。インタビューデータの内容は、就労の場において農作業をすることへの思い、農作業をしていてよかった点・大変な点、自分にどんな力がついたと感じるか、今後への思いなどについて対象者に自由に語ってもらっており、内容の豊富なデータであった。

分析方法

本研究には、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ (以下、M-GTA) を用いた。M-GTA では、分析テーマと分析焦点者を設定する。本研究の分析テーマは、「就労継続支援 B 型事業所において農作業に従事する精神障がい者は農作業を通してどのような意味を見出しているか」とした。次に、研究者の関心は、就労継続支援 B 型事業所において農作業に従事する精神障がい者が、農作業をどのように捉えているのか、また、従事する精神障がい者にとって農作業がどのような価値をもつのかという精神障がい者の体験の意味の明確化であるため、就労継続支援 B 型

事業所において農作業に従事する精神障がい者を分析焦点者とした。

(2)農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所の就労支援者を対象とした質的研究

農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所における精神障がい者への支援プロセスを明らかにすることを目的とし、研究を行った。

研究参加者

調査に同意を得られた農福連携の先進県である A 県内の就労継続支援 B 型事業所において、精神障がい者の農福連携に係る就労支援を行っており、支援の中で困難さを感じた経験のある支援スタッフ（職業指導員・生活支援員）7 名とした。

調査内容

データ収集は、2020 年 12 月～2022 年 3 月に実施した。インタビューに先立ち、研究参加者へのインタビューにおいて精神障がい者への支援の様相をより効果的に引き出すため、対象となる就労継続支援 B 型事業所に 1, 2 日間通所し、研究参加者が日常的に支援を提供している場での支援の様子や事業所内の雰囲気、作業の内容を把握した。そして、研究参加者が指定する個室で、個別に半構成的インタビューを行った。インタビュー内容は、インタビューガイドに基づき、一事例を想起してもらい、事例の年齢・疾患名、一般就労経験の有無、事業所利用年数、支援の中で精神障がい者をどのように理解し、どのような意図で関わっていたのか、その時の思い、支援の中で困難さを抱えた場面ややりがいを感じた場面等を自由に語ってもらった。研究参加者の承諾を得て面接内容を IC レコーダーに録音し、録音内容を逐語録に起こしデータとした。

分析方法

本研究では、分析焦点者を「農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所の支援スタッフ（職業指導員・生活支援員）」、分析テーマを「農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所における精神障がい者への支援プロセス」とした。当初、分析焦点者を「支援スタッフ」とひとくくりにしていたが、分析を進める中で、支援スタッフの職種によっても支援の視点が異なるのではないかとという疑問が生じた。そのため分析焦点者の設定に立ち戻り、分析参加者を「職業指導員」、「生活支援員」に分けて分析を進めた。

2)農福“医”連携モデル（案）の構築に向けた検討と試行（2022～2023 年）

(1)就労継続支援 B 型事業所に通所する精神障がい者を対象とした質的研究と、(2)農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所の就労支援者を対象とした質的研究の結果をふまえ、農福“医”連携モデル（案）を開発し、試行的に効果検証を行った。

4. 研究成果

1)農福“医”連携モデル構築に向けた質的研究（2019～2022 年）

(1)就労継続支援 B 型事業所に通所する精神障がい者を対象とした質的研究

研究参加者の概要

研究参加者 13 名のうち男性 11 名、女性 2 名であり、平均年齢 40.31 ± 9.40 歳であった。疾患は統合失調症 6 名が最も多かった。

就労継続支援 B 型事業所に通所する精神障がい者にとっての農作業の意味

研究参加者の語りから、26 の概念を生成し、10 のカテゴリー、3 の大カテゴリーを抽出した。概念間の関係性を整理し、その概要を簡潔に文章化したストーリーラインと結果図：農作業がもたらす成長と回復のプロセスを作成した。ストーリーラインでは、就労継続支援 B 型事業所において農作業に従事する精神障がい者は、自然や人との関わり、そして自分と向き合う中で『農作業がもたらす成長』と『農作業がもたらす回復』を経験し、【農作業との向き合いかた】の変化も伴いながら、自分に合ったいきかたを身につけていっていた。『体得したいいきかた』として、ほどよい【塩梅を知る】といういきかた、自分のこととして今を【引き受ける】いきかた、【根付く】いきかたを作り上げていた。精神障がい者にとっての農作業の意味は、農作業によってもたらされる成長と回復を経て、いきかたを体得していく[農作業がもたらす成長と回復のプロセス]を示していた。

(2)農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所の就労支援者を対象とした質的研究

研究参加者の概要

研究参加者は男性 3 名、女性 4 名、合計 7 名であり、職業指導員が 4 名、生活支援員が 3 名であった。研究参加者 7 名の年齢は 55.0 ± 13.18 歳であった。

農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所における精神障がい者への支援プロセス

支援プロセスには、支援が順調に進んでいく職業指導員の[耕作の営み]サイクルと生活支援員の[調和の営み]サイクルがあった。そして、支援が順調に進まなくなる[淀み]のサイクルが、職業指導員、生活支援員ともに見出された。

職業指導員の語りから生成された概念は 30 概念であり、そのうち 28 概念から 6 カテゴリーが生成された。そのうち、2 カテゴリーは 5 サブカテゴリーから構成された。残りの 2 概念はカテゴリーと同等の説明力をもつ概念であった。6 カテゴリーのうち 1 つのカテゴリーは、支援プロセスの中核を担うものとしてコアカテゴリーに位置づけた。また、生活支援員の語りから生成された概念は 24 概念であり、そのうち 22 概念から 5 カテゴリーが生成された。そのうち 2 カ

テゴリーは 5 サブカテゴリーで構成された。残りの 2 概念はカテゴリーと同等の説明力をもつ概念であった。5 カテゴリーのうち 1 つのカテゴリーは、支援プロセスの中核を担うものとしてコアカテゴリーに位置づけた。

職業指導員、生活支援員それぞれの概念間の関係性を整理し、その概要を簡潔に文章化したストーリーラインと結果図を作成した。その後、職業指導員と生活支援員の 2 つの結果図を統合し、結果図：リカバリーを促進する支援プロセスを作成した。統合後のストーリーラインとして、職業指導員は、働くということを優先的なものと捉え、作業能力を高めることを主な目的とした支援プロセスとなっていた。その一方で、生活支援員は、居心地の良さや場や作業に調和して働くことを優先的なものとして捉え、自分の状態に気づき発信できるというような社会の中で過ごす社会性を高める支援プロセスとなっていた。その両者の核となる概念として、個の捉えというコアカテゴリーがみられた。職業指導員と生活支援員は、全く異なった視点を持って支援しているわけではなく、両者が働く場としての視点、生活を営む場としての視点の両方を持ち合わせていた。その中で、個の捉えを中心に据え、それぞれの専門性や視点を活かし、[耕作の営み] と [調和の営み] のサイクルを歯車の様に回していくことで、作業能力の獲得と社会性の獲得というバランスの取れた支援につながり、利用者のリカバリーが促進されていくことを示していた。ただし、どちらか一方、もしくは両方の個の捉えが揺らぎ、支援スタッフの捉えていた個がぶれて [淀み] のサイクルに入ってしまうと、バランスのとれていた支援サイクルが停滞してしまい、利用者の“個”がぶれた状態が続く。そのため、支援スタッフは自分の関わりに自信が持てず、その結果、支援の停滞につながってしまっていた。[淀み] のサイクルに入ることは一概に悪いことではなく、今まで捉えられていなかった新たな個との出会いでもあり、個の捉えが進化することにもつながる。停滞する時期を含みながらよりよい支援へと発展し、利用者のリカバリーが促進されていた。

2) 農福“医”連携モデル(案)の構築に向けた検討と試行(2022~2023年)

(1) 就労継続支援 B 型事業所に通所する精神障がい者を対象とした質的研究と、(2) 農作業を主とした就労継続支援 B 型事業所の就労支援者を対象とした質的研究の結果をふまえ、農福“医”連携モデル(案)を検討し、開発した。

医療分野の職種である看護職は、疾患をみる視点と生活をみる視点を併せ持っており、精神障がい者の“個”を多角的に捉えることができると考えられる。日々、生活の雰囲気や作業の様子を見て感じている支援スタッフと看護職が共に“個”を捉える取り組みをしていくことで、病気や障害の理解が進み、見立ての仕方や関わり方が見えてくる。それによって、精神障がい者の不可解な突然の言動がなぜ生じているのか少しずつ理解できるようになり、症状の出現や急な休みが自分の関わりのせいではないという安心感にもつなげると考えられた。そして、[淀み] からも抜け出しやすくなると考えられる。

農福“医”連携モデルの一つの取り組みとして、特に重度の精神障がい者が多く利用する就労支援 B 型事業所において医療的な知識をもつ看護職者が、支援スタッフである職業指導員や生活支援員に対し、精神障がい者の精神症状に伴う言動の意味やその捉え方について情報提供するとともに、一緒に事例検討会を行っていく協働プログラム(案)を作成した。プログラムには(2)の研究より導き出した、個がぶれてしまう「つかみづらさ」「見えにくさ」の 2 要素、個を捉えていくために必要となる、個の「捉えの進化」「捉えなおし」「分かち合い」の 3 要素に着目した視点を盛り込んでいる。このプログラムによって、就労としての農作業の場で起こっている現象を、支援スタッフと看護職者が一緒に意味づけしながら、個の理解が深まるような機会を提供する役割を担っていくことができると考えられ、支援スタッフが、精神障がい者の豊かな個を捉えることにつながっていくものと考えられる。また、支援スタッフの関わりによって精神障がい者のリカバリーが促進されているという、支援者スタッフの関わりにも意味付けをしていくことで、自身の関わりに自信を持つことにつながり、安心して支援に向かうことができると考えられる。

就労継続支援 B 型事業所の支援スタッフを対象に、協働プログラム(案)を試行的に実施した。支援スタッフより支援に困難を抱える事例を提示してもらい、支援スタッフとともに利用者の“個”の捉えについてディスカッションしながらプログラムの効果の検証を進めている。

3) 本研究の位置づけと今後の展望

今後は、農作業を主作業とする就労継続試験 B 型事業所のフィールドを増やし、農福“医”連携モデルの一つの取り組みとして協働プログラムを導入していく。協働プログラムを精神障がい者への対応方法として導入した就労継続支援 B 型事業所の支援スタッフを研究協力者とし、農作業における精神障がい者への関わりの変化や、関わった精神障がい者の変化(作業状況、精神症状の変化)などについてインタビューをし、質的に分析を行う。また、事業所を利用する精神障がい者の欠席日数や退所割合、一般就労への移行率などの指標も参考に分析を進め、プログラムの効果検証を継続して行っていく。

引用文献

- Elsen, T. V. , & Finuola, R. (2013). Policies and strategies of green care in Europe. In Gallis, C. (Ed.), Green care: For human therapy, social innovation, rural economy and education (pp.189-213). New York: Nova Science Publishers, Inc.
- 濱田健司. (2018). イタリアの社会的農業と精神保健:「配慮」と「成熟」. 共済総合研究, 76, 81-101.
- 厚生労働省職業安定局雇用開発部障害者雇用対策課地域就労支援室. (2013). 平成 25 年度障害者雇用実態調査結果. https://www.mhlw.go.jp/file/04-Houdouhappyou-11704000-Shokugyouanteikyokukoureishougai koyoutaisakubu-shougai shakoyoutaisakuka/251119_syougai koyoujoukyou.pdf
- 内閣府. (2019). 令和元年度版 障害者白書. <https://www8.cao.go.jp/shougai/whitpaper/r01hakusho/zenbun/index-w.html>

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計0件

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------